

医療は誰のもの

21

地域医療構想を考える

大学病院や総合病院から早期退院患者も受け入れ、在宅介護施設への橋渡し役を担う有床診療所。医療依存度の高い患者の増加を背景に、薬剤師の果たす役割がクローズアップされている。

第3部 有床診療所の今 ⑤

在宅復帰へ導く薬剤師



入院患者や老健入所者の服薬処方・管理を行う薬剤師の木村幸美さん。医療依存度の高い患者の急増を背景に、薬剤師の役割は増している

県内の薬剤師数 2014年度末現在で1091人。勤務先の割合は、薬局56%▽医療施設19%▽企業15%など。人口10万人当たり190.1人(全国平均226.7人)。総数は微増傾向にあるが、県が病院と薬局を対象に16年9月に行った調査で不足感は255人(早急に必要な128.4人、将来的に必要な126.6人)に上るなど深刻化している。

それだけではない。前述した血液疾患の男性患者の増加傾向にあるという。ような症例では、高額な薬剤費を伴う。診療所を退院し、仮に老健施設に入所しても、介護度に応じた支払われる給付額を超過するため、入所は困難を伴う。次につなぐベストな受け皿はどこか。それを判断する退院調整にも深く関わる。木村さんは言う。

「超高齢化で血液疾患がすくなく増え、抗がん剤投与には神経をつかう。ただセントラルクリニックのように大学病院からの紹介患者を受け入れ、対応可能な急性期機能(回復期)の病床が県西部で不足しています」

一方で、かきむ治療費で経済的に行き詰まり、療養(米子総局報道部・山根) 毎週土曜掲載

透析施設を備えるクリニックに転院してきた。

依存度高い患者大半

地域包括ケアの担い手として期待される身近な有床診療所。実は有床・無床を問わず常勤医師3人以上の施設を除き、医療法で薬剤師の配置基準はない。

89歳の男性透析患者は免疫の異常で血小板が破壊されて減り、出血しやすくなった。鳥取大医学部付属病

内科など専門外来は鳥取大病院からの非常勤医師で回してきた入院患者が4人に1人を占め、一般のクリニックでは使わないような特殊な薬の処方も行う。小田院長は「大半が重篤な慢性疾患や複数の合併症、末期のがんを抱えた治療継続中の患者だ。いわゆる医療依存度が高く、高度な薬物療法も含め総合的な医療ケアを施さないと在宅や介護施設への復帰につながる」と話す。

「両親が要介護者と認知症。在宅介護の大変さが身に染みて分かっていて、薬剤師の立場で何ができるのか考えてしまう」

スリムな容姿から「有床診療所薬剤師」の矜持がほとばしる。